

子育て支援者向け多胎育児支援研修プログラムの開発

Development of the Multiple Births Family Support Training Program
for Childcare Support Staff

布施 晴美 ^{1,2)}	糸井川 誠子 ^{1,3)}	大木 秀一 ^{1,4)}
Harumi FUSE	Seiko ITOIGAWA	Shuiti OOKI
大岸 弘子 ^{1,5)}	越智 祐子 ⁶⁾	河原 廣子 ⁷⁾
Hiroko OOGISHI	Yuko OCHI	Hiroko KAWAHARA
玄田 朋恵 ^{1,8)}	田口 章子 ^{1,3)}	田中 輝子 ¹⁾
Tomoe GENDA	Syoko TAGUCHI	Teruko TANAKA
天羽 千恵子 ^{1,5)}	志村 恵 ^{1,9)}	服部 律子 ^{1,10)}
Chieko TENBA	Megumi SHIMURA	Rituko HATTORI

【抄 録】

地域で暮らす多胎育児家庭の身近な存在となりうる地域子育て支援スタッフが、多胎育児家庭を支えるためのスキルを獲得するために「子育て支援者向け多胎育児支援研修プログラム」(以下プログラム)の開発に取り組んだ。23年度版プログラムの短縮版として24年度版プログラムを作成し、実施評価した。24年度版プログラムは、①多胎の妊娠・出産・育児と支援のニーズ、②ふたごの母親の体験談、③当事者性の尊重、④ワークショップ「多胎育児家庭の支援を考える」の4単元の構成とし、全国4か所で子育て支援者65名を対象に試行した。参加者の反応は、多胎家庭への理解が深まり、支援する際の態度や

¹⁾一般社団法人日本多胎支援協会
Japan Multiple Births Association

³⁾NPO 法人岐阜多胎ネット
Gifu-Tatainet

⁵⁾NPO 法人兵庫多胎ネット
Hyogo-Tatainet

⁷⁾NPO 法人かもママ
KAMO MAMA

⁹⁾金沢大学
Kanazawa University

²⁾十文字学園女子大学
Faculty of Human Life, Jumonji University

⁴⁾石川県立看護大学
Ishikawa Prefectural Nursing University

⁶⁾同志社女子大学
Doshisya Women's College of Liberal Arts

⁸⁾NPO 法人石川多胎ネット
Ishikawa-Tatainet

¹⁰⁾岐阜県立看護大学
Gifu College of Nursing

姿勢を再認識し、支援すべき課題を積極的に見つけて行こうという視点を見出すなど、満足度の高いものであった。これらの成果は23年度版プログラムと比較し大きな差はなかった。課題としては、多胎育児のノウハウを知るという目的で参加する受講生もあり、本プログラムは、単にノウハウを学ぶといったものではない点を明確に示す必要がある。また、多胎育児家庭を理解し当事者性を持った支援者としての態度を学ぶことに加えて、さらに多胎育児家庭のエンパワメントを引き出すためにできることを探るスキルを支援者が持つことも視点に加えたプログラムに改定していくことが見出された。

【はじめに】

今日少子化と言われている中で多胎児出生の割合は、生殖補助医療をはじめとする不妊治療の普及に伴い増加している。平成23（2011）年では、多胎は出産1000に対して9.5となっており、100人の母親のうち1人が多胎児の母親という割合になっている（大木、2013）。つまり、50人の乳児のうち、多胎で生まれた乳児がその中に1人いるというとらえ方ができ、多胎児が社会の中で稀な存在ではないことがわかる。

一方で、育児技術が熟練していない初産の母親にとっては、同時に2人あるいは3人の乳児を育てることが簡単ではないことも想像できる。育児経験のある経産婦の母親であっても、上の子どもの下に、さらに2人の乳児を育てることは、たやすいことではない。多胎育児についてはこれまでも多くの調査で、単胎児（妊娠・出産時に赤ちゃんが一人）の家庭よりも育児困難な状況に陥りやすく、核家族化の進行に伴い母親が家庭内に孤立し、虐待の危険性があることが指摘されてきており、多胎育児家庭への支援の必要性が述べられてきた（大木・彦、2010；大岸、2010；Ooki, 2013）。そして、多胎育児支援の現状として、多胎妊娠・出産を支援してきた産科医療施設の医療スタッフや地域保健活動を担っている保健師などの専門家が行う支援実践活動が多く紹介されている。

今回著者らは、多胎育児家庭への支援について、保健医療専門スタッフが行う支援とは別に地域で取り組む支援に視点を移し、地域子育て支援センター等における多胎育児支援の可能性を探り、そ

の意義と支援効果に着目した。そして、地域で暮らす多胎育児家庭の身近な存在となりうる地域子育て支援スタッフが多胎育児家庭を支えるためのスキルを獲得するために平成23年度から「子育て支援者向け多胎育児支援研修プログラム」（以下プログラム）の開発に取り組んだ。本稿では、23年度に作成したプログラムの短縮版として24年度に作成したプログラムに焦点をあて、その効果について考察したことを述べる。

【子育て支援者向け多胎育児支援研修プログラムの開発】

1. 多胎育児支援のためのプログラム開発のねらい

国が施策として挙げている地域子育て支援拠点事業として、①子育て中の親と子の交流の場の提供と交流の促進、②子育てに関する相談・援助、③地域子育て関連情報の提供、④子育ておよび子育て支援に関する講習会などの実施、がある（厚生労働省）。この事業は地域の様々な場で展開され、子育てに不安を抱き、また、子育てに負担を感じている母親を支援している。このような場の利用ニーズを持つのは、地域の中で生活している多胎育児家庭の母親も例外ではない。現在、多胎育児家庭支援の中心的な役割を担っているのは保健医療従事者である場合が多く、医療機関や保健センターなどで支援に関連した情報提供がされている。しかし一方で、多胎育児中の母親は、保健センター等に「こんなことを相談してもよいのか」、「気軽に尋ねられない」など遠慮が生じ、育児困難感や負担感、不安を抱えながら、精神的に追い詰められるぎりぎりまで一人で育児を頑張っ

てしまうことも多い。そのような多胎育児中の母親にとって、もっと身近で、毎日通っても構わないところとして、地域の子育て支援センター等の利用が考えられる。

多胎育児中の母親は、地域の中で交流の場を求めて、あるいは、子育ての助言が得たくて、また、ふたごの子ども達の相手をしてもらいたくて、育児から少し解放されて母親自身が心身ともにほっと一休みしたくて、等々様々な期待を持って地域子育て支援センター等に子ども達を連れて通うことも多い。そのような場で支えられて元気になる母親がいる一方で、子育て支援者の何気ない言葉に傷ついたり、他の母親との交流が図れずさびしい思いをし、別な居場所を探したり、あるいは結局家庭にこもってしまう母親もいるという。地域には、こうした多胎育児中の母親のニーズにも応えられる身近な存在としての子育て支援者が必要である。

そこで、子育て支援スタッフの多胎育児家庭の理解と支援促進のために平成23年度に研修プログラムを開発した。研修プログラムのねらいは、地域子育て支援拠点スタッフ・子育て支援センタースタッフ等、多胎育児家庭や多胎児にかかわる地域の支援者が、多胎家庭固有の育児状況やニーズを知り理解を深め、その対応について学ぶことで、多胎育児中の母親等が利用しやすい支援環境を作り、適切な支援が提供でき、多胎家庭の社会的・精神的孤立を予防することとした。多胎家庭が支えもらえる場として地域を活用することができれば、社会的・精神的孤立感等が軽減され、それは多胎家庭における虐待防止につながっていくと考えている。また、最終的な目標としては、このプログラムで学ぶことで、育児支援が多胎育児家庭に特化したことで終わるのではなく、支援の在り方について支援者自身が判断し実践する力を身につけていくことを目指している。それは多胎家庭以外のスペシャルニーズを持つ家庭（例えば、健康障がいのある子どものいる家庭、若年夫婦の

家庭、外国人の家庭、など）への理解と支援につながり、子育て支援の裾野を広げることも期待できると考えた。

2. 23年度版子育て支援者向け多胎育児支援研修プログラムの成果と課題

23年度版プログラムは、5単元6時間の展開（表1）のプログラムである。このプログラムは、独自作成した専門家による講話のDVDを視聴しその内容について研修会講師が補足するスタイルの単元、及び多胎育児中の母親の語りを聞く単元、ワークショップの構成となっている（多胎支援協会、2013）。

表1 23年度版多胎育児支援研修プログラムの概要

<p>5単元300分の展開（休憩を含み約6時間）</p> <p>①当事者性の尊重（約60分）： 独自制作DVD視聴と講師の補足説明</p> <p>②多胎の妊娠・出産（約60分）： 独自制作DVD視聴と講師の補足説明</p> <p>③多胎支援の必要性和ネットワーク（約40分）： 独自制作DVD視聴と講師の補足説明</p> <p>④多胎育児の特徴とアプローチ（約60分）： 多胎育児中の母親の生の声を聞く</p> <p>⑤多胎育児支援のワークショップ（約80分）： 事例を提示し、支援についてグループ討議 （独立法人福祉医療機構社会福祉振興の助成にて研修を実施）</p>
--

平成23年10月～11月に4か所の地域でプログラムを試験的に実施した。受講者56名の研修後の自由記述から、各単元については次のような反応が読み取れた。「①当事者性の尊重」については、当事者を大切にする支援の意味、当事者ではなくても当事者性を持つことができること、傾聴の大切さや対等性を持つことの大切さを知った、等の反応がみられ、この単元のねらいとしたものは、理解したと受け取れた。「②多胎の妊娠・出産」については、多胎妊娠・出産の経過が理解でき、

支援の必要性や今後どのような支援を行うとよいかといったことが述べられ、多胎児の母親がたどってきた妊娠・出産の背景が単胎児とは異なることを理解するものになった。「③多胎支援の必要性とネットワーク」については、多胎家庭の現状をさらに知ることが必要であり、受講者が今まで行ってきた支援の振り返りと今後の支援の方向性を見いだせ、子育て支援者としてのスキルアップの欲求を高めるものとなった。「④多胎育児の特徴とアプローチ（ふたごの母親の話を書く）」については、多胎家庭の育児困難な状況を実際に聞くことで、イメージがわき、ふたごの育児には支援が必要、自分たちの活動・支援の意味づけができた、といった記述が多く、当事者の実際の話はインパクトとして大きく、支援者が実際支援をどのようにしたらよいか向き合って考えることをさらに強化した効果があったといえる。「⑤多胎育児支援のワークショップ」については、ワークに取り組むことによって、受講者が自らの考えを述べ多くの意見を聴き共有できたことで充実感・達成感を得ていた。また、当事者性を再認識し、「子育てひろば」でよく見られる事例を通して具体的な対応や支援者側に求められる役割を再確認できていた。

23年版研修プログラムについて受講者自身の意識がどのように変容したかという点においては、多胎育児家庭に対して、漠然と「大変」としたイメージから、多胎育児家庭への理解と支援の必要性、支援する際の具体的な介入の方法が見出されたものとなり、一定の成果が得られたものとなったといえる。

23年度版研修プログラムの課題としては、まず研修時間の問題があげられる。研修は午前午後にわたって6時間を要するため、2日間にわけて実施する地域もあった。受講者90.7%が時間について「ちょうどよい」と回答していたが、すべての単元に参加することができない受講者もあり、短縮版の作成が課題となった。

DVD映像を用いた単元については、受講者にとって一方的なものになりがちなDVD視聴の内容をより印象付けるために、内容を補足する講師を配置した。補足説明をする講師の存在については87.3%の受講者が「必要」と答えており、目の前で補足の講話をする講師の方が、DVDの講師より受講者にとってなじみやすく、理解を深める役割を果たしていると考えられる。結局その場で説明する講師が必要であるのであれば、時間の短縮化を図る上で、DVD視聴に頼るのではなく、研修プログラムを熟知した講師数人が、ある程度同じ内容の講座を実際に提供できるようにするという視点で、さらなる教材開発を検討することを課題とした。

多胎育児中の母親の声を実際に聞くという講話は、受講者の反応からもはずせない。しかし、その場で多胎育児中の母親が思いを語るため、場合によっては母親の思いが引き出せず、十分に伝わらない可能性もある。より理解を促すためには、様々なケースの当事者のインタビュー映像を視聴した方が、時間の効率化も含めてより効果的であると思われ、DVD映像の作成を課題とした。

ワークショップについては、ワークショップは、それまでの受身的な研修から受講者自らが参加するスタイルになることで、研修の学びがより深まり、受講者自身の満足度も高い。様々な人の意見・考え方を共有することが、当事者性の想像力を広げる大切な機会となり、ワークショップについては、短縮版となった場合であっても削除はできない単元であると考えられる。短縮版プログラムにも取り入れるが、取り組むテーマについては再検討とした。

3. 24年度版子育て支援者向け多胎育児支援研修プログラムの内容

23年度版プログラムを精査改変した24年度版プログラム（表2）は、4単元3時間30分の展開となった。まず、「①多胎の妊娠・出産・育児と支

表2 24年度版多胎育児支援研修プログラムの概要

<p>4 単元170分の展開（休憩を含み約3時間30分）</p> <p><u>①多胎の妊娠・出産・育児と支援のニーズ（講話）</u> 約50分</p> <p>単胎とは異なるふたごの妊娠・出産・育児についての基礎知識として、その特徴や現状の課題を理解する。妊娠・出産を乗り越え、ふたご育児をしている母親の心身の状況について学び、一般的なふたごのイメージから、より具体的な現状を理解し、支援の必要性の意味を知る。</p> <p><u>②ふたごの母親の体験談（独自制作のDVDの視聴）</u> 約30分</p> <p>ふたごの母親3名へのインタビュー映像を通じて、具体的な多胎の妊娠・出産・育児の状況や現場で表明されることが少ないふたごの母親の心情とニーズを理解し、研修受講者が実際に関わる多胎家庭への支援について、具体的にイメージする。</p> <p><u>③当事者・当事者性の尊重（講話）</u>約40分</p> <p>あらゆる支援活動の主体は当事者であり、当事者一人一人を尊重した支援活動が大切である。よりよい支援活動を実践するためには当事者性を持つことが重要であり、当事者性を持つために必要な態度・姿勢を理解する。</p> <p><u>④多胎育児家庭の支援を考える（ワークショップ）</u> 約50分</p> <p>研修受講者自身が、今の立場でできる多胎家庭への対応や、支援・事業について考え、実現に向けて具体的に構想でき、また、地域での多胎支援ネットワークを広げる意欲をもつことをねらいとしている。3～5人の小グループでまずグループワークをし、その後各グループの意見を全体で共有する。（財団法人こども未来財団・小規模研修会助成にて実施）</p> <p>注：講話についてはパワーポイント資料を用いて行うが、会場によって担当講師が変わるため、台本を用意し、それに沿って展開した。</p>

援のニーズ（講話）」については、23年度版プログラムの「②多胎の妊娠・出産」「③多胎支援の必要性とネットワーク」を再構成し、パワーポイ

ント資料を用いて、多胎の妊娠・出産・育児についての理解を促し支援の必要性の意味を理解することをねらいとした単元とした。次に「②ふたごの母親の体験談（DVD）」については、3人のふたごの母親の語りのDVDを視聴し、より具体的なイメージを促進し、支援を主体的に考えられることをねらいとした。「③当事者・当事者性の尊重（講話）」については、当事者を尊重した支援活動、当事者に寄り添うために必要なことは何であるのかについて理解を深めることをねらいにし、23年度版プログラムの「①当事者性の尊重」を短縮しパワーポイント資料を使用しながら展開した。「④多胎育児家庭の支援を考える（ワークショップ）」については、受講者が研修で学んだことと子育て支援者として立場や体験を振り返りながら統合し、今後の自身の取り組みについて考え、意見交換をし、学びや思いを共有することをねらいとした。

【子育て支援者向け多胎育児支援研修プログラムの評価に関する調査】

1. 目的

改定した24年度版プログラムについて、23年度版プログラムの実施成果（多胎支援協会、2013）と比較し、その効果を検討することを目的とした。

2. 方法

1) 調査対象と調査方法

平成24年9月～11月に全国4か所で実施した研修参加者を対象に質問紙調査を実施した。研修実施地域と参加人数は遅刻・早退者を含めて、石川県加賀市（17人）、東京都武蔵野市（14人）、岡山県総社市（14人）、岐阜県高山市（20人）で、地域子育て支援センター等で活動しているスタッフ65名であった。この参加者の中には、23年度版研修プログラムを受講した人はいなかった。

調査は、研修前後に無記名の質問紙調査の回答

を依頼し、研修前および研修後にその場で回収した。

2) 調査内容

研修が始まる前に、自作の多胎育児に関する知識8項目(表3)について、3件法(そう思う・どちらとも言えない・そう思わない、あるいは、もっと多い・ちょうどそのくらい・もっと少ない)で回答する質問紙と、多胎家庭に対する認識についての自由記述を求める質問紙の調査を実施した。多胎育児に関する知識8項目の質問紙は、23年度版プログラムの評価に用いたもので、24年度と比較するために用いた。

研修が終了した後、再度多胎育児に関する知識8項目の質問紙と多胎家庭に対する認識や支援について自由記述求めた質問紙の調査を実施した。また、研修会の満足の程度(研修会全体、開催日時、プログラム内容)についても、3件法(満了した、どちらとも言えない、不満)の質問を設けた。

表3 多胎育児に関する知識の質問項目

1. ふたご(みつご)はそっくりだ
2. ふたご(みつご)の妊娠は医学的には正常妊娠
3. ふたご(みつご)の妊娠は単胎と同じ妊娠過程
4. 母親のうちふたご(みつご)の母は1000人にひとり
5. 不妊治療はふたご(みつご)全体の約半数程度
6. ふたご(みつご)も一人の子も子育ての苦労は同じ
7. ふたご(みつご)育児者は負担感が強い
8. ふたご(みつご)育児者は「ひろば」で疎外感を感じる

3) 倫理的配慮

24年度版研修プログラムを評価するためという調査の目的を説明し、回答は自由であること、無記名であり個人は特定しないこと、中断や拒否等

による不利益は生じないこと、成果を公表することについて口頭で説明し、質問紙への回答をもって同意とした。回答は任意であり強要はしなかった。また、質問紙回収に際しては、個別に質問紙の提出の有無も確認しなかった。

3. 結果

1) 多胎育児に関する知識8項目の調査の結果

質問紙調査の回収は、研修前、研修後共に63名であったが、研修に遅れて参加した受講者や途中早退した受講者もあり、全くの同一人物が63名ということではなかった。有効回答数は表4に示すとおりである。「5. 不妊治療はふたご全体の約半数程度」は他の項目と比べて極端に有効回答が少なく、3件法の選択ができなかったものと考えられる。

表4 調査対象者の有効回答数

	研修前 n=63 有効回答数	研修後 n=63 有効回答数
1. ふたごはそっくりだ	63	57
2. ふたごの妊娠は医学的には正常妊娠	63	57
3. ふたごの妊娠は単胎と同じ妊娠過程	63	56
4. 母親のうちふたごの母は1000人にひとり	60	58
5. 不妊治療はふたご全体の約半数程度	59	49
6. ふたごも一人の子も子育ての苦労は同じ	61	58
7. ふたご育児者は負担感が強い	61	58
8. ふたご育児者は「ひろば」で疎外感を感じる	62	58

研修前後の多胎育児に関する知識として、23年度版と比較して表したのが、図1～8である。23年度版プログラムの受講者は59名(早退者含む)で、24年度版プログラムの受講者数とは大きな違いはなかったため、回答の割合を百分率で示した。23年度版と24年度版の研修前のデータを比べてみると、その特徴に大きな違いは見られず、23年度

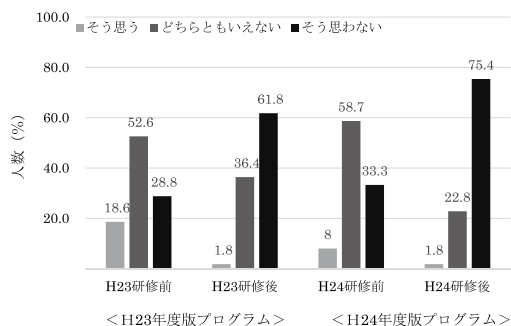


図1 項目「ふたご（みつご）はそっくりだ」における回答の割合

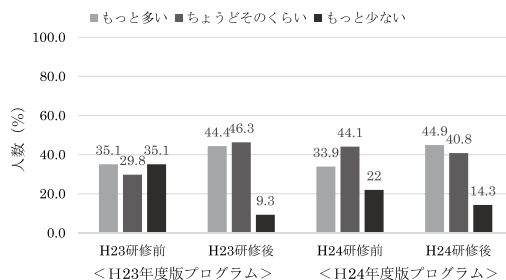


図5 項目「不妊治療は、ふたご（みつご）全体の半数程度」における回答の割合

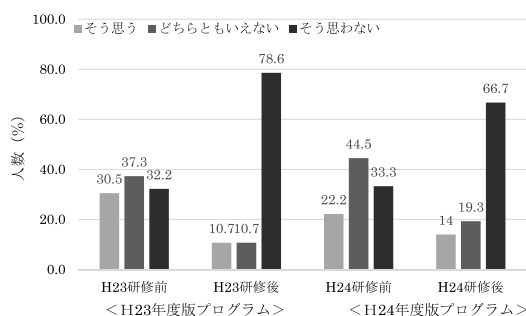


図2 項目「ふたご（みつご）の妊娠は医学的には正常妊娠」における回答の割合

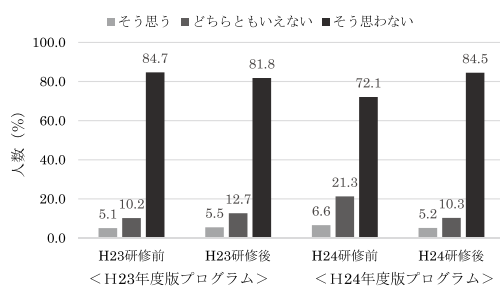


図6 項目「ふたご（みつご）も一人の子も子育ての苦勞は同じ」における回答の割合

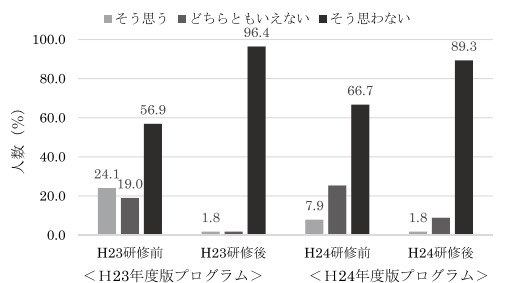


図3 項目「ふたご（みつご）の妊娠過程は単胎と同じ」における回答の割合

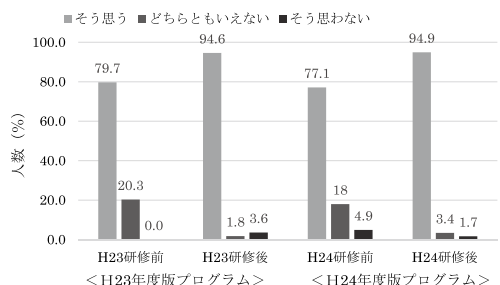


図7 項目「ふたご（みつご）の育児負担感は強い」における回答の割合

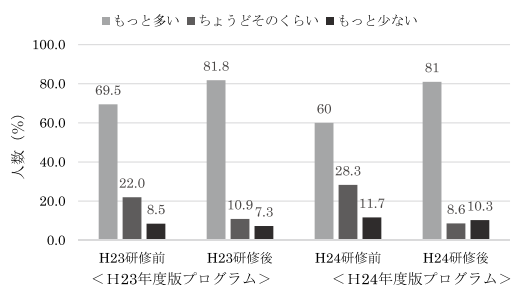


図4 項目「ふたご（みつご）の母親は1000人に1人」における回答の割合

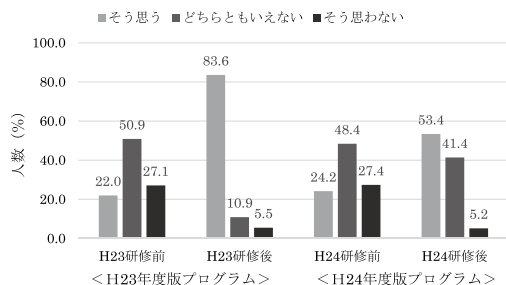


図8 項目「ふたご（みつご）育児者は疎外感を感じる」における回答の割合

と24年度の研修参加者の多胎育児の知識はほぼ同じ傾向をもった集団であったといえる。

研修後の知識の変化については、23年度版と24年度版を比較すると、図8の「疎外感を感じている」を除いて、ほぼ同様の変化の傾向を示している。図8「疎外感を感じている」については、24年度版は「どちらとも言えない」という回答の割合が多く、これは研修会場別にみると、ある1か所の研修会場に「どちらとも言えない」という回答が多く見られていた。「疎外感」というキーワードがとくに強調されるのが、プログラム単元2番の「ふたごの母親の体験談（独自制作のDVDの視聴）」であるが、その会場では、DVD視聴時に音声のトラブルが発生していた。

2) 24年度版プログラム研修前後の自由記述

24年度版プログラムの受講者の研修前の多胎家庭に対する認識の記述については56人から回答があった。記述文を文節ごとに区切り、分類・整理した。研修前の認識（表5）としては、大変、負担が大きい、支援が必要、意見交換や交流の場が必要、母親の話を聞きメンタル面での支援が必要、支援の方法を知ること、支援に対する戸惑い、などの記述が多かった。

参加者の研修後の多胎家庭に対する認識や支援についての記述については、48人から回答があった。その記述（表6）には、多胎家庭への理解の深まり、支援するための自己の態度や姿勢のあり方、支援するための視点、支援すべき課題を見つけていく積極性、今子育て支援の現場で自身が取り組めることは何か、などが述べられていた。さらに表7には、自由記述の一部を紹介した。

表5 研修前の多胎家庭に対する認識の記述 n=56
(重複回答)

<p><ふたご育児家庭のイメージの記述></p> <ul style="list-style-type: none"> 大変・何をするのも大変 (23) 負担が大きい・苦勞している (11) 精神的につらい、悩みがある (3) 身体的な疲労、睡眠不足 (2) 外に出られない (4) 孤立しやすい (1) 親のジレンマ多い (1) <p><ふたご育児家庭の支援の面からの記述></p> <ul style="list-style-type: none"> 支援が必要、支援の環境が必要 (8) 母の話を聞くこと、話を聞く場所が必要 (7) 意見交換の場や交流できる環境が必要 (3) 母親の精神的なケア、心の支え、悩みの支援が必要 (6) 母親のリフレッシュタイム・息抜きをつくる (2) 孤立させない (2) 検診など手が足りない時の手伝いが必要 (1) 双子を育ててよかった、双子がいたから楽しい思い出ができた、メリットを提供 (1) 具体的な支援の方法を知りたい、どのように働きかけたらよいか戸惑う (8) 具体的な大変さを知りたい (1)
--

表6 研修後の多胎家庭に対する認識や支援についての記述 n=48 (重複回答)

<p><支援するための自己の態度や姿勢のあり方></p> <ul style="list-style-type: none"> 母親の話を耳を傾ける、話を聞くことの大切さ (14) 母親の身近な存在である、寄り添う、母親の悩みや大変さに共感する (9) 支援者として必要なこととして当事者性、想像力を働かせること (9) 専門知識をもつ、先入観にとらわれない、勝手に代弁してはいけない (3) 一人ひとりとしっかり向き合う (2) <p><支援するための視点></p> <ul style="list-style-type: none"> ストレスが発散でき、気持ちになるような支援、ほっとできる時間の提供 (10)
--

安心できる場の提供（3）

子育てできる環境づくりが大切（1）

<多胎家庭への理解の深まり>

あらためて大変さを実感、想像以上、多くの課題を乗り越えてきた、サポートが必要（8）

双子の母親は思っている以上にセンシティブ、傷つけない言葉がけ（4）

さまざまなケースがある（2）

<支援すべき課題を見つけていく積極性>

できる限り手伝いたい、自分のできる支援、支援できることを見つけない（8）

実態を把握し、ニーズに応じて寄り添いたい（2）

今1番してほしいことを見極めて手伝いたい（3）

急に支援が必要になった時にすぐ対応できるところとは（1）

<今子育て支援の現場で自身が取り組めることは何か>

母親同士を結び付ける支援をしたい（2）

活用できる社会資源の情報収集と情報提供、行政との連携も大切（4）

1人で頑張らないで、たくさんの人の手を借りてよいことを伝えたい、ねぎらう（5）

母親の育児を否定しない、母親を尊重、孤立感減らす（3）

ふたごの母親でよかった、育児が楽しいと思えるように支えたい（1）

表7 研修後の多胎育児家庭支援に関する自由記述（一部抜粋）

- ・大変さや悩みに共感すること、母親のしていることを否定しないで、身近な存在として支援していきたい。
- ・専門知識を持つとともに、母親の話に耳を傾け支援を考えていきたい。
- ・自分が思っている以上に多胎児の母親はセンシティブ、言葉がけに配慮が必要
- ・実情を知り、寄り添いたい。
- ・想像力を働かせ、勝手な解釈をしない、「当事者性」が大切。
- ・話を聞く大切さを理解した、どんなことを考え、求めているのか理解していきたい。
- ・支援できることを見つけないという意識が、さらに高まった。
- ・ひろばに来られた多胎家庭の方々が、こんなに多くの課題を乗り越えてきていたのか、想像していなかったことを反省した。
- ・自分が想像していた以上に大変で、深い課題があった。頑張っているママの気持ちを傾聴し、身体がしんどい時にはほっとできる時間を作りたい。
- ・先入観にとらわれず、話をしっかり聞いて、たくさんの情報が届けられるように勉強していきたい。
- ・経験や可能な限りの研修も必要だが、当事者とのコミュニケーションや傾聴も特に必要。当事者でなくても、できること・考えることはたくさんあると感じた。

3) 研修会の満足の種類

研修終了後に実施した受講者の満足に関する調査については、「研修会全体」と「プログラムの内容」については概ね良好な回答が得られた（表8）。「開催日時」については、他の項目と比べ、「どちらもいえない」という回答が増えていた。

研修の感想について記入する欄には、「勉強になった」、「参加してよかった」、「いろんな気づきがあった」、「今後に役立てたい」という肯定的な記述が多くあった。一方、今後の改良に向けての建設的な意見として、「多胎育児の大変さの理解を促す内容であったが多胎育児の楽しさやメリッ

表8 研修の満足の種類 n=59 (%)

	満足した	どちらもいえない	不満	無回答
研修会全体	55人 (93.2)	1人 (1.7)	0	3人 (5.1)
開催日時	48人 (81.4)	11人 (18.6)	0	0
プログラム内容	54人 (92.9)	2人 (3.4)	0	3人 (5.1)

トも示したほうがよい」、「具体的な支援方法が聞きたかった」、「父親の支援についても知りたい」等があった。

4. 考察

1) 23年度版プログラムとの比較

24年度版プログラムについて、それまでDVD視聴と内容の補足という形式をとっていたものを、受講者の反応をみながらパワーポイント資料を用いて講話をするスタイルに変更した。プログラム展開に当たってはいつも同じ専門家である講師が出向いて講座を開講するには限界があり、その対策としてDVDを作成した経緯があったが、DVD視聴は、どのような会場でも同じ学びが提供できるが、一方的な展開が否めず、さらに視聴後の補足が重要となり、時間を要するものになっていた。そこで改訂版では、DVD視聴による講座は廃止し、講話の台本を作成し、研修の担当講師が代わっても同じプログラムが提供できるように改変した。

また23年度版では、会場に多胎育児中の母親(当事者)1名が来て、受講者は当事者の「生の声」を直接聞いてもらう構成となっていたが、この部分は、3人の母親のインタビュービデオを改めて作成し、DVDの視聴に変更した。この部分の内容は、知識を提供する講義形式のものとは異なり、母親が体験談や思いを語るためDVD視聴でも受講者にとって馴染みやすいものとなると考えた。

ワークショップについては、受講者が参加することで、研修の学びが深まり、受講者自身の満足度も高い。様々な人の意見・考え方を共有することが、当事者性の想像力を広げる大切な機会となる。24年度版プログラムは23年度版プログラムよりも取り組む時間はやや短い、プログラム全時間に占める割合は増やした。ワークショップは、それまでの受け身の講座から、参加型形式をとり、受講者自身の自己の振り返りや他の受講者との意見の共有をすることで、本研修の効果を引き出すことになり、プログラムの根幹ともなる。このワークショップがプログラムの成果に大きく関与すると考えている。

24年度版プログラムについて、受講者の反応か

ら、23年度版プログラムと比較してみた。

まず、多胎育児に関する知識8項目の調査結果(図1~8)の単純な比較では、研修前後でほぼ同様の変化が認め、短縮版においても同様の効果はあると判断できた。しかし、気になる点として、表4の「5. 不妊治療はふたごの全体の約半数程度」から、24年度版プログラムの研修後の回答において他の項目と比べ無回答が多く、印象に残りにくい部分になっていると考えられる。また、図5「不妊治療はふたごの全体の約半数程度」の研修前後の変化をみると、23年度版も24年度版も回答が「もっと多い」「ちょうどそのくらい」でばらつきがみられ、あいまいさが読み取れた。この結果から、不妊治療の割合については、講話内での提示が関連していると考えられる。

次に受講者の自由記述から検討した。23年度版プログラムの研修前後の自由記述について、報告書(多胎支援協会, 2012)では次のように述べられている。「研修前の記述では、漠然と子育てが大変そうという記述が多くみられ、具体的にどのような大変なイメージしているものは少ないようであった。研修後の記述では、多く述べられていたのが、多胎育児の大変さが想像以上であり具体的に知ることができたこと、妊娠中から出産後においても母親の心身の負担が大きく消耗していること、孤立しがちな母親への支援が重要であること、これからどのように多胎育児中の母親と関わっていくとよいのかその方向性や姿勢・態度考えられるようになったということが示されていた。」24年度版プログラムにおいても、多胎育児家庭に関する認識や支援について23年度版プログラムと同様の気づきや理解、支援のあり方や支援の視点、支援する姿勢・態度、今後の方向性や課題が記されていた。こうしたことから、24年度版プログラムは23年度版を短縮したものであるが、23年度版と同様の成果が得られると評価できた。

受講者の研修に対する満足の程度については、概ね良好な回答であったが、開催日時については、

「どちらともいえない」といったややネガティブな含みを持った回答も2割近くみられた。これについては、短縮版プログラムではあったが、研修が昼食をはさんで午前午後を実施した会場もあり、受講者が拘束感を抱いた可能性もある。また、4か所いずれの研修も平日に行っており、土曜日・日曜日等の休日開催の要望とも考えられる。さらに、今回の開催は秋期の開催となっていたが、今後は秋期という時期も含めてさらなる検討が必要であると思われる。

2) 24年度版プログラムの課題

24年度版プログラムの研修前の記述をみると、多胎育児の大変さを漠然とイメージし、支援が必要と感じているレベルであったが、研修後の記述では、多胎家庭への理解の深まり、支援する際のスタッフの態度、支援するための視点、支援すべき課題を見つけていく積極性、自分が今できること・取り組めることは何か考え見出すことにつながっていた。地域子育て支援者を対象に研修プログラムを展開することは、その地域における多胎育児支援への関心を喚起し、多胎育児支援が医療従事者等の専門家が実施することにとどまらず、地域の中で多胎育児支援の理解の裾野を広げる機会となったと評価できた。

本プログラムのねらいは、「地域子育て支援拠点スタッフ等、多胎育児家庭や多胎児にかかわる地域の支援者が、多胎家庭固有の育児状況やニーズを知り理解を深め、その対応について学ぶことで多胎育児中の母親等が利用しやすい支援環境を作り、適切な支援が提供でき、多胎家庭の社会的・精神的孤立を予防する」ことであり、支援者がこのことに気づき、今後の支援を考えていく土台ができたと考える。

一方で、図8「疎外感を感じている」については、24年度版は研修後「そう思う」の回答が6割に満たず、原因としてDVD教材の音声の影響を受けたと考えられた。この部分の理解は、研修の

ねらいとしても重要な部分であり、DVD教材に頼りすぎている傾向が、この結果からはからずもわかった。単元1番の講話の中でもより印象に残るように取り上げていく必要性が見出せた。

また、本研修の満足度については概ね良好な回答であったが、研修前に「多胎育児の具体的なノウハウを知りたい」というニーズを持って参加してくる受講者も多いと思われる。本研修では、具体的な多胎育児スキルといったノウハウの教示ではなく、多胎育児家庭を理解し当事者性を持った支援者としての態度を学ぶことにある。まずは、多胎育児家庭の母親を尊重して支援するということを学ぶ研修会であり、多胎児の母親が地域とつながっていくための支援の基本を学ぶものである。そして支援者自らが、様々なケースと出会い、そこから多胎育児のノウハウを得るために必要なことを理解し、支援の中で獲得していくと考えている。本研修会が目指すものと受講者とのずれが発生しないように、研修の視点を明確に示しておく必要がある。

さらに今後は、研修内容が「多胎育児は大変である」ということばかりを強調している傾向があるため、多胎育児の楽しさも支援者に理解してもらう必要もある。また、大変だった多胎育児を乗り切った母親や地域で多くの子育て支援を受けてきた母親の中には、自分自身に少し余裕ができた時、次は、自分が周囲の人に何ができるのか考え、これまでの育児体験を活かしたいと行動するようになる母親も多くいる。支援された母親がそのようなになるためには、支えられた、乗り越えられたという経験が大切であり、そこに導いていく人々の中に地域子育てスタッフが含まれていることの自覚も促し、多胎家庭のエンパワメントを引き出すためにできることを探るスキルを支援者が持つことも視点に加えたプログラムに改定していくことが見出された。

プログラム評価の課題としては、研修終了後の受講者の反応からプログラム効果を評価したが、

受講者が研修終了後地域の子育て支援スタッフとして多胎育児家庭の母親とどのような関わりを持っているのか、実態を調査しないと本当の評価はできないという限界がある。今後は受講者が参加した地域子育て支援拠点がその後の取り組みとして何を行っているのか等の聞きとり調査を実施し、評価していくことも大切であると考え。加えて、多胎育児に関する知識8項目の質問設定については、本プログラムのねらいを適切に評価しているものと判断するには不十分であることも否めない。23年度版プログラムの研修前後の変化と24年度版プログラムの研修前後の変化を比較して、多胎育児に関する知識の獲得に影響があったのかという点での評価になる。今後研修プログラムのねらいにマッチした評価項目を検討する必要があると考える。

【おわりに】

平成20年と平成22年に乳児のふたごのひとり死を死なせてしまい、母親が傷害致死で逮捕されるという事件が起きている（多胎支援協会、2012）。裁判で、一人の母親は相談窓口等に助けを求めたにもかかわらず、理解や支援が得られず追い詰められていった状況が明らかになった。もう一人の母親も公的機関等から支援が得られず社会の中で孤立し、疲弊した姿が明らかになった。公判で母親は「誰かに助けてもらいたかった」と述べている。平成20年の事件については、裁判所は、「過酷な育児」と認定し、「被告人は被害者の成長や育児に対する不安等にさらされながらも、愛情をもって被害者に接し、自己犠牲をして、被害者らふたごの養育に専念した結果、皮肉にも被告人自身を、肉体的に精神的に疲弊した状態に追い詰めることにもなり、衝動的に引き起こした」と述べている。

支援のない過酷な多胎育児の中では、いつ母親が加害者になるとも限らない。地域の中でそのような母親の気持ちに寄り添える子育て支援者を増

やし、虐待死を防いでいきたいと考えている。今後も子育て支援者向け多胎育児支援研修プログラムのさらなる改訂をおこない実施し、多胎育児家庭が地域の中で支えられて孤立しないで暮らしていけることを願っている。

最後に、本プログラムの研修会を受講し、調査にご協力くださった受講生の皆様、研修会開催の支援をしてくださった子育て支援拠点の皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

また、本稿は、第27回日本双生児研究学会（東京）、及び第7回乳幼児保健学会（横浜市）で発表したものに加筆したものである。

尚、24年度版研修プログラムは、「財団法人こども未来財団・小規模研修会助成」により実施したものである。

引用文献

- 大岸弘子（2010）：多胎児への虐待と障がい・行政の役割、チャイルドヘルス、13（10）；27-30.
- 大木秀一、彦聖美（2010）：多胎出産の動向これからの多胎育児支援、チャイルドヘルス、13（10）；4-7.
- S. Ooki（2013）：Fatal Child Maltreatment Associated with Multiple Births in Japan: Nationwide Data between July 2003 and March 2011, Environmental Health and Preventive Medicine, doi:10.117/s12199-01301335-9, 2013.
- 大木秀一（2013）：多胎児家庭の育児支援に役立つ図と表、いしかわ多胎ネット.
- 多胎支援協会（2012）：「一歩踏み込む支援」を防げたはずのふたごの「ふたご虐待死事件」の裁判から、（公益財団法人キリン福祉財団24年度キリン・子育て公募助成事業）「つながろう！ふたご・みつごを安心して地域で産み育てるために」事業報告書.
- 多胎支援協会（2013）：第2章、子育て支援拠点スタッフのための多胎育児支援研修プログラムの開発、（平成23年度独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成）全国的・広域的ネットワーク活動支援事業、虐待防止のための連携型多胎支援事業報告書、14-29.